

研究課題	非言語コミュニケーションにおける日米中文化的差異 —映像教材を使用した外国語教授法
研究代表者	西蔭 浩子 (表現学部 表現文化学科 教授)

1. 研究目的

本研究の代表者たちは、平成 17 年より日本語母語話者に対する外国語教授法、特に「言語コミュニケーション」を中心に研究を行い、レトリックに重点を置いた外国語教授法、外国語学習における母語干渉、文章構成に見られる文化的差異の問題点を調査・分析してきた。その結果、外国語教授法には、異なる言語間での異文化理解を深める、より効果的なコミュニケーション研究の必要性が浮き彫りになった。

コミュニケーション研究には、言語による「言語コミュニケーション」(以下「言語」とする)とジェスチャー・対人間空間などによる「非言語コミュニケーション」(以下「非言語」とする)がある。Birdwhistell(1970)は「言語」が 30-35%で、「非言語」が 65-70%とし、Mehrabian(1968)は「非言語」を 93%とし、「言語」はわずか 7%としており、「非言語」研究が不可欠となる。「非言語」研究は「対物学」「動作学」「接触学」「近接学」「時間学」の 5 つの領域から成る。

本研究の目的は、代表者たちがこれまで培ってきた日米中の文化的差異に関する研究の蓄積を基礎とし、「非言語」の中でも「動作学」と「近接学」と「接触学」の 3 領域に注目した。第一に、文化的行動様式のデータを分類・分析し、映像による教材を制作し、最終的に文化的差異の理解を助長する、新たな外国語教授法の開発にある。

「非言語」は「言語」と異なり、文章やイラストだけでは表現できない困難さを伴っている。本研究は、日本語・英語・中国語という各言語の違いを「視覚で認識できる映像教材」を教育現場に提供することで、新たな教授法開発につながると考えている。具体的には、日本人・アメリカ人・中国人のそれぞれのジェスチャーや顔の表情などの「動作学」、人が対話するときの距離の取り方などの「近接学」そして、会話中に相手の身体に接触する頻度などの「接触学」を映像にまとめ、「非言語」が使用される場面や状況への深い理解を教育現場に提供することができる。

英語と中国語を目標言語として学ぶ学生が、円滑なコミュニケーション力を身に着けるには「言語」だけでなく「非言語」の理解を抜きにすることはできない。効果的な「非言語」を学ぶために、臨場感のある映像教材を制作し、異文化コミュニケーションを測るための外国語教授法の開発を進める。

2. 研究方法

研究期間を 3 年とし、平成 30 年度は「動作学」「近接学」「接触学」の 3 領域に関する先行研究に当たり、分類・分析し、日米の「動作」の違いに焦点を当て、「ジェスチャー」や「顔の表情」の差異を試験的な撮影を行う。平成 31 年度は平成 30 年度の試験的撮影をした映像をチェックし、訂正すべき箇所を確認する。その上で日米に中国を加え、「動作学」の映像教材の本格的撮影を行う。次に人と人の距離の研究である「近接学」の日米中の違いを撮影する。平成 32 年度には日米

中の中で異なる、人と人の触れ合い方について映像化する。「動作学」「近接学」「接触学」の映像が揃った段階で、教材としてどのように使うことが効果的な教授法につながるかを提言する。

平成30年度の研究について報告する。研究は2段階で行われた。

第1段階は「日米の動作のリスト化」である。「動作学」の中でも映像化可能な「ジェスチャー」と「顔の表情」の違いをリスト化した。「ジェスチャー」のリスト化は、3つ分類を想定して行った。(1)「日本人特有のジェスチャー」、(2)「アメリカ人特有のジェスチャー」、(3)「日本人とアメリカ人では意味が異なるジェスチャー」である。「顔の表情」は「ジェスチャー」と同じ分類を試みたが、日本人は表情に乏しいために、ジェスチャーに較べて日本人の顔の表情を抽出することは困難さであることを再認識している。

(1) 日本人特有のジェスチャーのリスト例

その1「自分を指すジェスチャー」が「自分の鼻を指す」。アメリカ人にとっては「鼻」でしかない。アメリカでは「心臓のあたりを指す」

その2「お金を表すジェスチャー」が「親指と小指を丸める」のに対して、アメリカ人は「親指と人差し指をこする」。日本ではコインを意味し、アメリカでは紙幣を意味する。

その3「数を数えるジェスチャー」が「親指から指を折っていく」のに対して、アメリカ人はこぶしを握った状態で「親指から開いていく」

(2) アメリカ人特有のジェスチャーのリスト例

その1「がんばって」を表すジェスチャーは、人差し指に中指を乗せた形(十字架の形)を相手に向ける。**Keep my fingers crossed.**(指を折ったままにしておきます)という表現からきている。

その2「むずかしい」を表すジェスチャーは、頭上に右手をかざして前後に動かす。**It's over my head.**という表現からきている。

その3「たぶん」を表すジェスチャーは、右手を前に出し、ゆらゆら動かす。**May be so, may be not.**からくる。

(3) 日本人とアメリカ人では意味が異なるジェスチャー

その1「こっちにきて」という日本人のジェスチャーはアメリカ人には「あっちに行って」とか「さよなら」に見える。

その2「お金」を表す親指と人差し指を丸めるジェスチャーは、アメリカ人には「OK」サインに受け取られる。

第2段階は、リスト化されたジェスチャーをどのように映像化するかを検討するために、試験的撮影を行った。「上半身全体」撮影、「身体部位のみ」撮影を行い、映像を視聴してみて修正が必要かどうかを確認する。その上で、実際の映像化の準備に入る。

「顔の表情」に関しても同じように2段階で撮影を進める。

第1段階は「悲しい」「うれしい」「興味がある」「困っている」「怒っている」「憤っている」など感情表現に注目した。アメリカ人は表情が豊かであるが、日本人は不快な表情があまり見られないために、比較することは簡単ではなく、アメリカ人を中心にした映像を中心に撮影する方向を考えている。

第2段階は、リスト化された「顔の表情」をどのように映像化するかを検討するために、試験的撮影を行った。試験的撮影を行ったものを確認した結果、日本人の表情には変化が乏しく、判断が困難である。しかしながら、そのわかりにくさが日本人の「顔の表情」の特徴であると捉えることができる。一方、アメリカ人の表情は、変化に富み喜怒哀楽が明快である。しかしながら、“angry”と“disgusted”と“upset”の表情の差異は判断が難しい。

3. 研究成果と公表

平成30年度の研究は、申請段階で予定した半分しか実行できなかった。理由は2つある。第1の理由は「ジェスチャー」と「顔の表情」のリスト化に予想以上の時間がかかったことが挙げられる。第2の理由は、「非言語」の映像教材としていかに学習者にとって理解しやすい映像にするかの試行錯誤の繰り返しである。

ここに平成30年度の研究成果と問題点について述べる。

研究成果としては、先行研究に発表されている日本人とアメリカ人の「動作学」について、「ジェスチャー」と「顔の表情」の2点に情報をまとめることができたことである。

(1) 「動作学」の中の日本人とアメリカ人の「ジェスチャー」

「ジェスチャー」は **body language** もしくは「身振り言語」とも呼ばれ、身体の一部を使って自分の気持ちや意思を第三者に伝える方法である。頭、顔、手や腕、指、足腰など身体全体を使って行う行為である。先行研究の分類は、大きく、身体部位の使い方に関する研究、身体に関する日本語および英語表現を分類した研究であった。研究内容は「日本人のジェスチャー」と「アメリカ人のジェスチャー」を比較分析しているものが主で、「日本人のジェスチャー」もしくは「アメリカ人のジェスチャー」と個別に分析しているものの数には限りがある。

本研究では、身体言語の中でも「頭を使ったジェスチャー」「顔を使ったジェスチャー」「手や腕を使ったジェスチャー」「指を使ったジェスチャー」に限定した。理由としては、これらの4つの部位を使ったジェスチャーが多く、かつ、映像教材としての効果が期待できるという判断である。

リスト化したジェスチャーは(1)「日本人特有のジェスチャー」、(2)「アメリカ人特有のジェスチャー」、(3)「日本人とアメリカ人では意味が異なるジェスチャー」に分類された。

(1)の「日本人特有のジェスチャー」を特定するには、アメリカ人のジェスチャーとの比較なしには行えない。そのため(2)の「アメリカ人特有のジェスチャー」との比較をしながらのリスト化となった。対象とした部位の中で一番多くリスト化されたのは「手」と「指」を使ったジェスチャーであった。意思をもってメッセージを送るジェスチャーだけではなく、無意識のうちに「手」や「指」のジェスチャーが大きなメッセージを発している点は注目すべきことである。

本研究で特に注目したことは、(3)の「日本人とアメリカ人では意味が異なるジェスチャー」である。日本人にとってはプラスメッセージを送るジェスチャーが、アメリカ人にとってはマイナスメッセージを送る危険性が存在する。例えば、日本人が「来て、来て」というメッセージを送るジェスチャーは、アメリカ人に「そっちに行け」のメッセージととられかねない。アメリカ

人はそのジェスチャーを目にして”Good-bye!”と離れてしまうと、それを目にした日本人は「自分は無視された」ととらえがちである。一番注意しなければならないのは「非言語」の知識がない場合は、相互誤解のまま人間関係を修復する機会にも恵まれない状況を生んでしまうことである。

(2) 「動作学」の中の日本人とアメリカ人の「顔の表情」

「ジェスチャー」に比べて「顔の表情」のリスト化は困難を極めた。理由は、日本人は「顔の表情」が多くないこと、一方、アメリカ人は「顔の表情」が豊かで、ひとつひとつの意味をリスト化することに時間がかかっていることである。

試験的撮影は、リスト化されたジェスチャーや顔の表情の一部を抽出し、大学教育における異文化コミュニケーションの教材としての意義や効果を検討した。

「ジェスチャー」に関しては、「上半身全体」撮影、「身体部位のみ」撮影を行ったが、内容によってその撮影方法を変えることが重要である。「指」のジェスチャーは、その具体的な形を明示するためには「身体部位のみ」の撮影を中心に行い、背景となる被撮影者の洋服の色などにも配慮することが映像としては重要な要素であることの発見もあった。

問題点と今後の研究の課題について述べる。

問題点は、リスト化された「ジェスチャー」と「顔の表情」から抽出する内容をいかに絞り込むかである。リスト化の数の順位から「指」「手と腕」を中心とした撮影を中心としていく方向を考えている。

一番の問題は「顔の表情」である。「アメリカ人」と「日本人」を比較すると、その数の違いも大きな問題となる。日本人の表情は外国人にとって「能面のような表情」に見えるとの指摘もあるように、喜怒哀楽の表情の変化が顕著ではない。一方アメリカ人の表情ははっきりしているが似たような表情の分類をどのようにしていくかが本研究にとっての要となる。

今後の課題は、平成 30 年度の研究の遅れを取り戻すために、「ジェスチャー」の「指」と「手と腕」の抽出を行い、撮影を行うことである。そのことが、今後の研究を円滑に進めるための確固とした方法が築きあげることができると思う。